

著者のホンネ

# 日本で続く長期停滞の原因は 一貫性を損なった改革にある

「欧州発かつ久々の本格的な日本経済論」として、注目されています。骨太の本書で、最も訴えたかったことは何ですか。

やはり、「1980年代から日本の資本主義は何も変わっていない」という見方に対して、「決してそうではない」ということです。

この点は、日本経済を研究する外国人の学者や、多くの日本人もそう思い込んでいるようですが、日本の資本主義は大きく変容しています。ただ、変化のスピードが漸進的であったために、これまでの概念ではうまく説明することができなかつたのです。

ルシュヴァリエさんの本は、日本経済における変化を探求するに当たって、歴史分析や制度比較などの手法を取り入れています。

そのような分野横断的・学際的なアプローチを取ったのは、戦後の日本を象徴するさまざまな領域で起こった変化に着目し、それらのメカニズムを解明するためでした。制度、産業構造、不平等などの問題を多面的に扱っています。

Shinichi Yokoyama



Sébastien Lechevalier / 1973年生まれ。経済学博士（専門は日本経済）。現在、パリにあるフランス国立社会科学高等研究院教授。研究活動が続けながら、さまざまな学際的プロジェクトに関係する。日仏財団の理事長も務める。

私の専門は経済学ですが、必要に応じて、政治経済学、労働経済学、社会学、産業経済学、イノベーション理論など異なる専門分野の分析ツールを借用しています。なぜ、そのようなアプローチが必要だったのですか。

世の中で起きている問題を解明するには、やはり構造的な領域に踏み込む必要があるからです。

例えば、日本でも拡大している不平等の問題は、産業の質的变化と福祉制度の欠陥に伴って起きた労働市場の動きが主な原因である

セバスチャン・ルシュヴァリエ  
フランス国立社会科学高等研究院  
(EHESS) 教授

と説明できます。そのメカニズムは、本書で詳しく書きました。フランスで本書は話題になり、すぐに英語版が出ました。どうして、70〜80年代の日本経済や制度に関心を持ったのですか。

外国人が書いた日本についての研究では、79年に出た『ジャパン・アズ・ナンバーワン』がよく知られています。日本は、世界のどの国とも異なる発展の仕方をしてきた。その後、80年代になると世界を席巻する快進撃が続きます。欧米では、その秘密を知ろうと

## 日本資本主義の大転換

セバスチャン・ルシュヴァリエ  
新川敏光 監訳

『日本資本主義の大転換』  
セバスチャン・ルシュヴァリエ 著  
(岩波書店 3400円)

日本経済や日本型経営の研究が盛んになりました。ところが、90年代に入ってバブル経済が崩壊してからは、顧みられなくなりま

しかし、欧州は、日本の奇跡を忘れるべきではないし、70〜80年代に日本が直面した変化には学ぶところがあります。長期停滞が続く欧州は、他国の経験で自らを見直す必要があるのです。本書は欧州の読者に向けて書いていますが、日本の読者にも役立つはず

欧州の視点で見ると、日本はどのように映るのですか。

例えば、グローバルイノベーションでは、米国的な方法論が唯一の道ではありません。日本では「構造改革が遅れているから停滞した」との見方が支配的です。しかし、「従来からの制度を考慮せずに改革を進めて一貫性を損なったから長期停滞を招いた」という見方ができます。本書はこの問題も詳述しています。本誌・池富仁